

幕末の大津・太間町における人口変動

Population change in Taima-cho, Otsu toward the end of Edo period

長 島 雄 毅

Yuki NAGASHIMA

本稿では、幕末の大津・太間町を対象として人口変動とその背景に関する分析を行った。太間町の人口は、文政11年(1828)の167人から減少を続けて天保10年(1839)には104人となり、その後は100~140人程度で推移した。その背景には、1830年代前半までは奉公人の減少、それ以降は借屋世帯の流動性の高さが影響していた。太間町をめぐる人口移動は主に大津市中で展開していたが、元治大火による避難とみられる京都からの転入も観察された。

キーワード：幕末、都市、大津、人口変動、人口移動

Key words : Edo period, city, Otsu, population change, migration

I はじめに

本稿は、幕末の大津・太間町を対象として、宗門改帳を利用した人口変動とその背景にある人口移動の実態を明らかにするとともに、近接する大都市・京都との関係性の一端を示すことを目的としている。

近世の大津をめぐる諸研究は、大津市(1981)の市史編纂事業の成果が土台となって進められてきた。例えば、都市構造に関するものとしては、水谷・大場(1995)による元禄期の絵図を用いた町並みの復原、大場(1998)による沽券帳の分析を通じた宅地取引の実態解明などが行われてきた。一方で、都市社会の諸相に焦点を当てたものも進められ、樋爪(1995)は町定の分析を通じて町共同体や町運営の実相を捉え、さらに、樋爪(1996)では「小歩き」とよばれる町用人の存在形態に関する検討が行われている。また、大津の町人文化を背景とした大津祭についても、早い段階から木村(1976)によって展開過程が論じられるなど議論の対象となってきた。しかし、こうした大津に関わる研究のなかで、人口は議論の対象としてとりあげられるに至っていない。大津の人口は、大津全体の人口変化について各研究で言及される程度に留まり、個別町における人口史料の分析は着手されていない。したがって、大津の都市社会のあり方を解明する点において人口研究を進めることには大きな意義がある。

一方で、大津における人口研究は別の観点からも重要な意義がある。それは、近世都市の歴史人口学研究において進められてきた京都に関する議論との接点があることによる。具体的な

例として、浜野（2011）によれば、幕末京都の住民は京都市中出身者が多数を占めたのは確かであるが、山城（郡部）・近江・丹波・丹後・若狭・美濃などからの転入者も一定程度みられたとされる。また、速水（2009: 194-195）によれば、京都の四條立売中之町における他国出身の奉公人は、大津を含む近江国滋賀郡が最多であったという。すなわち、伝統的に京都との結びつきが強かった近江のなかでも、大津はとりわけ京都と人的な結びつきが強かった。こうした京都との関係性について、大津における人口の分析を通じて検討することにも意義があると考えられるのである¹⁾。

以上の問題意識に基づいて、本稿では大津を構成する町のひとつである太間町を対象として、宗門改帳²⁾を利用した分析を行っていく。まずⅡでは対象となる大津と太間町に関して概観し、Ⅲでは太間町の宗門改帳の特徴を検討する。Ⅳでは、人口変動とその背景について人口移動にもふれながら明らかにし、さらにⅤでは幕末に観察された京都からの特徴的な転入に焦点をあてて論じる。最後に、Ⅵでは得られた結果を整理するとともに今後の見通しを述べることにしたい。

Ⅱ 対象地域の概観

近世の大津は東海道・北国海道の分岐する陸上交通の要衝として、あるいは琵琶湖の水上交通の要衝として急速な発展を遂げた。そうして成立した町々は「大津百町」とよばれるようになり、17世紀末の人口は18,774に達した。しかし、近世中期に西廻り航路が整備されると、琵琶湖水運の重要性は相対的には低下し、大津の人口は天保14年（1843）時点で14,892となった（大津市 1981: 140-143）。流通の面からみると、17世紀半ばから19世紀初頭までに敦賀港への入津米は5.7%にまで減少したとされ、大津での荷揚げ米の減少にも少なからず影響したことが想定される（樋爪 2012）。このように、近世後期にかけての大津は経済的には停滞傾向にあった。しかし、他地域との人的・物的な関係性が途絶えたわけではなく、大津の社会・経済を考えるうえで重要な要素であったことには変わりはない。

図1は明治中期の仮製地形図をトレースし、大津の市街地（建物）の広がりを示したものである。大津は、西から南に広がる山地と琵琶湖との間に挟まれた平地に広がる都市である。市街地は「大津百町」の範囲を越えて、松本村とその東の馬場村の街道沿いにも展開していることが読み取れる。東から伸びてくる東海道は松本村内において3本の通りに分かれて大津市中に入ってくる。これらの通りは山手側から順に京町通、中町通、浜通とよばれ、大津市中でも古くからの町が面している。このうちの京町通が東海道筋にあたり、京都方面へは市街地のなかで直角に折れて南行し、逢坂山を越えてつながっていた。一方、湖西を北上する北国海道も大津から伸びており、琵琶湖水運とともに北陸方面へと向かう重要ルートとなっていた。このように大津は、宿場町でもあり、物資の集散地でもあり、他地域とのつながりの多く有する都市であったと位置づけられる。

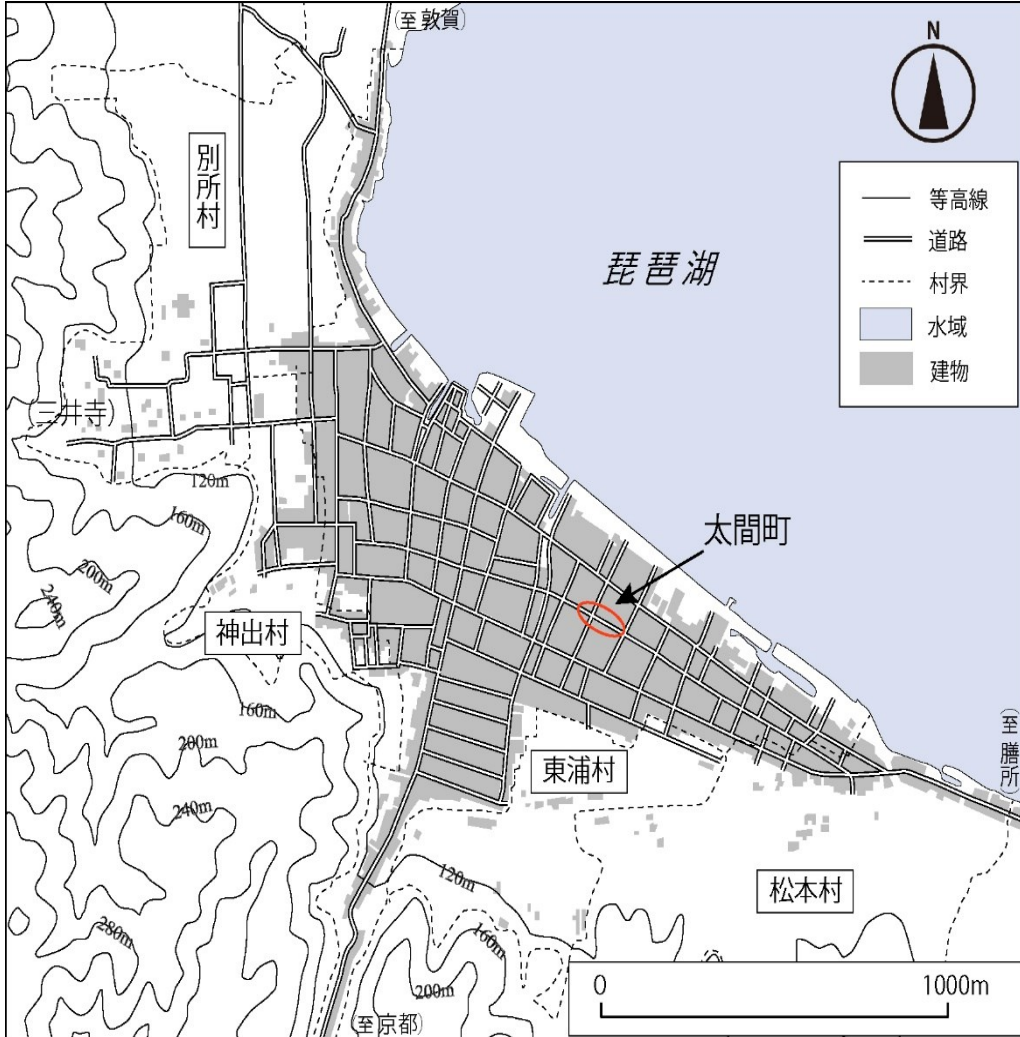


図1 地域概観

注) 明治期以降に建設・設置されたことが明白な施設等は示していない。
 基図：2万分1仮製地形図「大津」1989年測量，1892年発行

本研究の具体的対象となる太間町は、こうした大津のなかに位置する個別町のひとつである。人口は百数十人程度と小規模であったが、大津築城の際に坂本から移転してきた旧町のひとつとして中町通に面したところに位置している。太間町には明治2年(1869)時点で家持16、借屋21の合計37世帯が登録されていた(表1)。ここからは米関係5世帯、肴関係5世帯などがみられ、大津の集散地としての性格や琵琶湖の漁業に関わる産業を垣間みることができる。また、住民の属性をみていくと女性の世帯主が6名みられるが、このうち4名が「仕立物渡世」となっており、零細な経営を行う住民の存在を想像させる。太間町の位置づけをみるうえでは大津祭の「曳山町」であったことも重要な点である。大津祭は、京都の祇園会の影響を受けつつ

表1 太間町住民の職業構成（明治2年）

No	家	所有形態	商売・渡世
1	松屋助九郎	家持	造酒屋渡世
2	万屋善兵衛	家持	米雑穀渡世
3	麴屋弥兵衛	家持	麴味噌渡世
4	大津屋善助	家持	道具渡世
5	総屋六兵衛	家持	芋類渡世
6	近江屋弥助	家持	乾物渡世
7	総屋さの	家持	小間物渡世
8	藤田屋忠兵衛	家持	米渡世
9	樽屋善蔵	家持	紙商売
10	塩屋小兵衛	家持	呉服太物渡世
11	草津屋みね	家持	仕立物渡世
12	塩屋治兵衛	家持	道具渡世
13	玉屋芳兵衛	家持	乾物渡世
14	越後屋嘉左衛門	家持	金物筵渡世
15	万屋とみ	家持	塩物問屋渡世
16	松屋善七	家持	肴物渡世
17	万屋長助	借屋	古手渡世
18	大石屋嘉助	借屋	塩肴渡世
19	白銀屋新兵衛	借屋	塩肴干物渡世
20	谷村屋清兵衛	借屋	塩肴干物渡世
21	松屋清蔵	借屋	茶商売
22	近江屋五兵衛	借屋	塗物渡世
23	木屋たけ	借屋	仕立物渡世
24	浅井屋久兵衛	借屋	油屋稼渡世
25	近江屋藤兵衛	借屋	青物渡世
26	吉丸屋太郎吉	借屋	米屋渡世
27	森野屋茂兵衛	借屋	葎商売
28	沢屋新五郎	借屋	米仲渡世
29	熊屋伊八	借屋	町中奉公人
30	近江屋文助	借屋	肴物渡世
31	中屋久次郎	借屋	刀道具渡世
32	近江屋伊助	借屋	肴屋渡世
33	亀屋きせ	借屋	仕立物渡世
34	塩津屋せき	借屋	仕立物渡世
35	塩屋亦兵衛	借屋	米屋渡世
36	鍵屋次助	借屋	粉類雑穀渡世
37	菱屋半右衛門	借屋	呉服太物渡世

史料：太間町「宗旨人別改帳」（1869年）

大津の町人文化に支えられて発展したものであり、天孫神社の秋の例祭として毎年10月に開催されている。大津祭の曳山は、寛永12年（1635）の狸山を皮切りとして安永5年（1776）までに14の町で制作され、太間町も享保2年（1717）以降に龍門滝山を出すようになった（大津

市 1981:168-178)。このことは、近世期の太間町の富裕さを示すこととともに、それを維持し続けることができた共同体の安定性を示唆するものといえる。

以上のように、太間町は確固たる経済基盤を持つ家持世帯が居住するとともに、零細経営の借屋世帯も存在するなど、多様な経済階層の住民がみられた町であるといえるだろう。

Ⅲ 太間町の宗門改帳

本稿の主たる史料は太間町自治会共有文書（大津市歴史博物館寄託）に含まれる宗門改帳である。宗門改帳は、古くから研究に利用されてきたのであるが、とりわけ 1960 年代以降に進展した歴史人口学的な研究における基本的な史料として再注目されるようになった³⁾。宗門改帳は禁教政策の観点から江戸幕府の命令によって全国の町・村などで定期的に作成されるようになったが、徐々に人口調査としての意味合いが強くなっていったという。地域や領主、町場か村方かによって形式や記載事項の差違がみられるが、一般的には世帯単位で構成員の名前と年齢、檀那寺などが書き上げられ、帳面の末尾には調査対象の町・村における宗派別・男女別の総人数が記載されている。さらに、世帯ごとの持高や前年からの世帯員の異動を詳細に記載しているようなケースもあった。こうした情報がどこまで調査・記載されるのかは領主の意向が大きく、分析の前提として十分な検討を要する⁴⁾。

表 2 は太間町の宗門改帳の概要をまとめたものである。太間町では年 1 回の調査が行われ、文政 11 年（1828）から明治 3 年（1870）のうち 32 年分の宗門改帳が確認される。これらはほとんどの年代で「宗門人別改帳」という標題であり、幕末には 8 月、7 月、9 月などの時期に作成されていた。しかし、明治期になると標題は「宗旨人別改帳」となり、作成時期も 5 月・3 月と大きく変化した。また、標題の変更に伴って記載方式の変更が生じたことも指摘される。宗門改帳の記載方式は「現住地主義」と「本籍地主義」の 2 つに分類されるが⁵⁾、太間町では明治維新を境にして、現住地主義から本籍地主義へと変化したことが確認される。そのため、江戸時代の帳面では他所からの入奉公や住民の出奉公といった一時的な動きが反映されているのであるが、明治期の帳面では正式な異動（結婚・養子など）のみが調査対象となった。ただし、明治 2 年（1869）については、住民の出奉公についてのみ把握が可能となっている。

宗門改帳による分析の可能性を左右するのが異動に関する記載である。表 2 で示している異動の記載のうち、「増減の総計」は出生・死亡・転入・転出の増減の総計が記載されているか否かを示す。さらに、「転入・転出の事由」は引越、婚姻、奉公といった具体的な理由が明示されているか、「転入元・転出先の地名」は地名の記載の有無をそれぞれ表している。これらの情報の有無は人口移動の地理的範囲を把握するうえで大変重要であるが、太間町の宗門改帳はやや複雑に変化している。まず、「増減の総計」については文政 11 年（1828）～弘化 2 年（1845）と明治 2 年（1869）の帳面に記載されているのであるが、転入・転出の内容や具体的な地名まで記載されているものは大きく減少する。また、実際に異動情報を整理・分析するうえで、明治

幕末の大津・太間町における人口変動（長島雄毅）

表2 太間町の宗門改帳の記載事項

年	月	標題	異動に関する記載				
			増減の総計	転入・転出の事由	転入元・転出先の地名		
文政	11	1828	8	宗門人別改帳	○	○	△
	12	1829	8	宗門人別改帳	○	○	△
	1	1830					
	2	1831					
	3	1832					
	4	1833	8	宗門人別改帳	○	○	×
	5	1834	8	宗門人別改帳	○	○	△
	6	1835					
天保	7	1836	7	宗門人別改帳	○	×	×
	8	1837	7	宗門人別改帳	○	×	×
	9	1838	7	宗門人別改帳	○	×	×
	10	1839	7	宗門人別改帳	○	×	×
	11	1840	7	宗門人別改帳	○	○	○
	12	1841	7	宗門人別改帳	○	○	○
	13	1842	7	宗門人別改帳	○	○	○
	14	1843	7	宗門人別改帳	○	○	○
	15	1844	7	宗門人別改帳	○	○	○
	弘化	1	1845	9	宗門人別改帳	○	○
2		1846	7				
3		1847	7	宗門人別改帳	×	×	×
4		1848					
5		1849	7	宗門人別改帳	×	△	×
嘉永	1	1850	7	宗門人別改帳	×	△	×
	2	1851					
	3	1852	9	宗門人別改帳	×	×	×
	4	1853	9	宗門人別改帳	×	×	×
	5	1854	9	宗門人別改帳	×	×	×
	6	1855	9	宗門人別改帳	×	×	×
	7	1856	9	宗門人別改帳	×	×	×
安政	1	1857	9	宗門人別改帳	×	×	×
	2	1858	9	宗門人別改帳	×	×	×
	3	1859	9	宗門人別改帳	×	×	×
	4	1860	9				
	5	1861	9	宗門人別改帳	×	×	×
	6	1862	9	宗門人別改帳	×	×	×
文久	1	1863	9	宗門人別改帳	×	×	×
	2	1864	9	宗門人別改帳	×	×	×
	3	1865	9	宗門人別改帳	×	×	×
	4	1866					
元治	1	1867					
	2	1868					
慶応	1	1869					
	2	1870					
	3	1871					
	4	1872					
明治	1	1873					
	2	1874					
	3	1875					

注) 網掛けの年は現存せず。

2年(1869)分には前年(明治元年)分の帳面が存在しないことから、異動の検証が困難である⁶⁾。これらから、IVの2でとりあげる人口移動の分析は、天保11年(1840)～弘化2年(1845)分において可能と判断した。

以上のように、太間町の宗門改帳は一定の年数が存在しており貴重なものであるが、記載方式の細かい変化がみられる。したがって、分析にあたってはこうした限界があることをふまえたうえで進めていく必要がある。

IV 太間町の人口変動の分析

1 人口変動とその背景

宗門改帳の利用によって幕末における太間町の人口変動を示したのが図2である。太間町では、対象期間当初の文政11年(1828)が167人で最大の人口を有していた。しかし、そこから1830年代にかけて人口は急減し、1840年前後には100人程度になっている。1840年代半ばにいったん増加するものの1850年代には再び100人程度の水準となり、その後、1850年代末から増加傾向をみせて、明治2年(1869)には140人を越える水準にまで到達した。

こうした太間町の人口変動は、奉公人の消滅と借屋世帯の動向という2つの観点から説明することができる。まず、前者について、総人口を家族員と奉公人を分けて示すと(図3)、太間町では文政11年(1828)時点では町全体で20人以上の奉公人が登録されていた。しかし、奉公人はその後10年ほど継続的に減少していった結果、町内に数人程度しか存在しなくなった。すなわち、文政11年(1828)から天保4年(1833)年ごろにかけての総人口の減少は奉公人の減少が主要因であったといえる。実際に、この期間の太間町では総世帯数は減少しておらず(図4)、奉公人の減少によって世帯規模が小さくなったことの影響が理解される。こうした奉公人の減少がなぜ生じたのかは明らかにしえない。しかし、太間町の状況を考えるうえで参考になる議論として、近世の中期から後期にかけては、奉公人が多く存在する都市と奉公人が激減する都市との二極化が進んだとされ、同じ近江国内の彦根城下町も後者に該当したとされる。そして、こうした奉公人の減少という傾向は臨時雇用化や雑業層の拡大という就業構造の変化を背景にしていたという(斎藤2002:49-119)。この議論に対して、太間町や大津の町々の状況が該当するのかどうか現時点で判断することはできないが、ひとつの可能性として考えることができるだろう。

次に1830年代半ば以降の総人口についてだが、これは図4の総世帯数、さらには借屋世帯数とかなり連動していることがうかがわれる。太間町の総世帯数は、弘化2年(1845)と明治2年(1869)には37世帯に達した一方で、天保10年(1839)は25世帯、安政3年(1856)～安政5年(1858)は27世帯という状況であった。ここからは、世帯数が減少したときにはかなりの空き家が生じていたことが理解されよう。正確な数字はあきらかでないものの、太間町の家屋数が37軒であったとすれば、天保10年(1839)には30%以上の家屋敷に居住者がいない

幕末の大津・太間町における人口変動（長島雄毅）

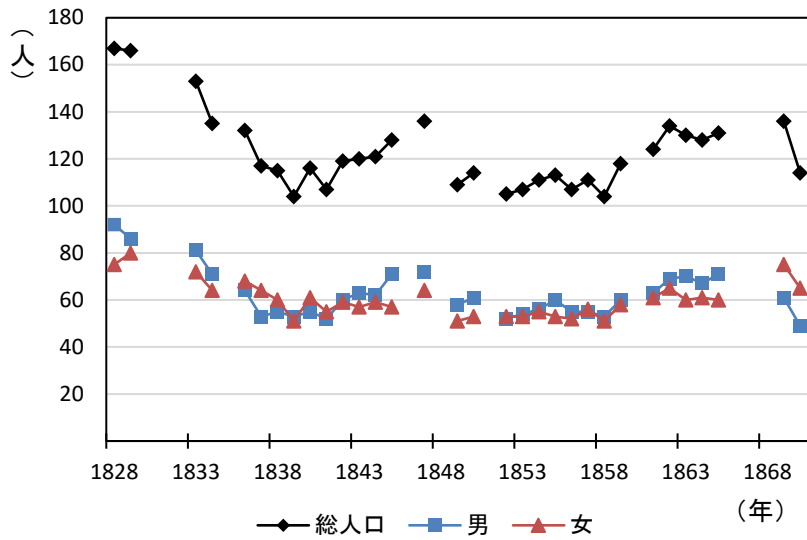


図2 太間町の人口推移

注) 1868・1869年の宗門改帳は本籍地主義で作成されており、他所へ奉公中であることが明らかな住民は除外して算出。

史料：各年の宗門改帳

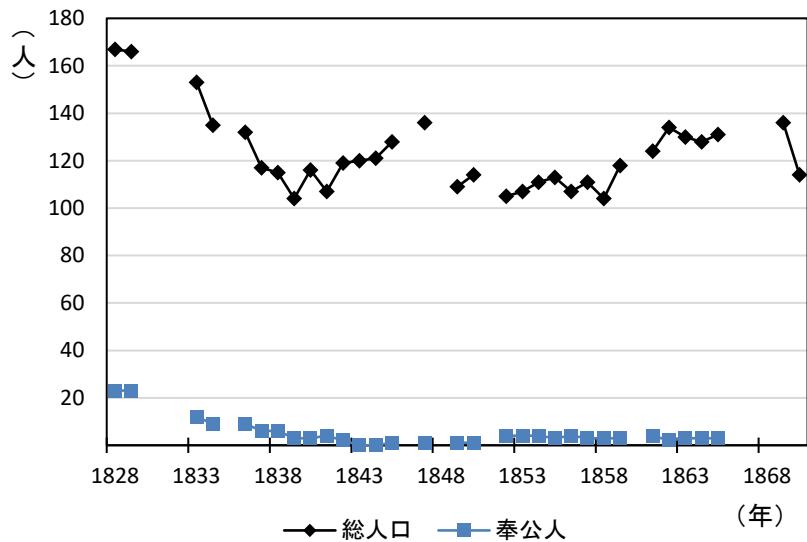


図3 太間町の総人口と奉公人数の推移

注) 1868・1869年の宗門改帳は本籍地主義で作成されており、他所へ奉公中であることが明らかな住民は除外して算出。

1868・1869年の他所からの奉公人数は不明。

史料：各年の宗門改帳

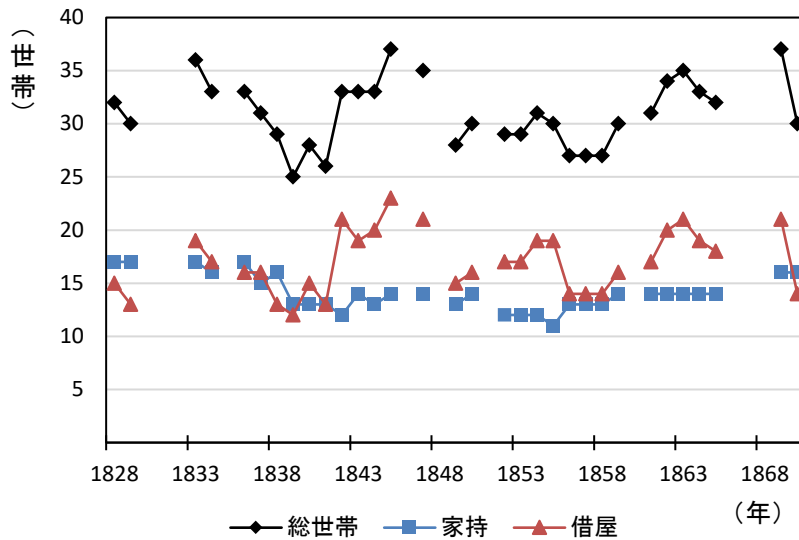


図4 世帯数の推移

史料：各年の宗門改帳

状況であった。このように、太間町の人口が変動したもうひとつの要因として、そもそもの世帯数の変動が大きかったことが指摘される。幕末の太間町の人口は借屋世帯の流動性の高さによって左右され、長期的にみれば活況を呈していたとは言い難い状況であったのかもしれない。

2 人口移動の実態

本節では太間町における人口移動、すなわち転入と転出の実態を分析する。前述したとおり、太間町の宗門改帳は記載形式の点から住民の異動事由を把握できない期間の方が長い。そうしたなかで、Ⅲでの史的な検討をふまえて天保11年(1840)～弘化2年(1845)年を対象として、太間町との人的交流の一端を明らかにする。宗門改帳を利用した移動の分析は歴史地理学における人口研究の典型的な方法であるが、本稿の分析はそうした先行研究と比較すれば対象期間や規模も小さいものである。しかし、幕末大津の都市社会の一断面にせまるという意味では一定の意義があると思われる。

人口移動の分析に先立ち、表3で住民の増減全体について示す。太間町の人口規模を反映して出生・死亡はいずれの年であっても数人に留まるが、移動は、転入・転出ともに多くが2桁の単位で観察される。特に、天保14年(1843)の転入31人、転出30人という規模は太間町の住民の約4分の1が入れ替わった計算になる。平年でも年間で1割程度の住民の入れ替わっていたことがうかがわれ、人口移動が太間町の社会に対して大きな影響をもたらす要素であったのは間違いないであろう。

幕末の大津・太間町における人口変動（長島雄毅）

表3 太間町の人口増減（1840-1845）

年	増加				減少			
	出生	転入	不明	合計	死亡	転出	不明	合計
1840	1	25		26	1	12	1	14
1841	1	6		7	4	12		16
1842	4	23		27	2	13		15
1843	3	31		34	3	30		33
1844	4	13		17	5	10	1	16
1845	1	23		24	2	15		17

史料：各年の宗門改帳

表4 太間町への転入者の移動元と人数

年	大津	京都	近江	「田舎」	その他	不明	合計
1840	2 (8.0)	1 (4.0)		2 (8.0)		20 (80.0)	25 (100.0)
1841	3 (50.0)	1 (16.7)	1 (16.7)	1 (16.7)			6 (100.0)
1842	19 (82.6)	2 (8.7)				2 (8.7)	23 (100.0)
1843	27 (87.1)	3 (9.7)		1 (3.2)			31 (100.0)
1844	10 (76.9)	2 (15.4)		1 (7.7)			13 (100.0)
1845	21 (91.3)				1 (4.3)	1 (4.3)	23 (100.0)

注)「大津」には市街地が接続している松本村・馬場村を含む。

カッコ内の数値は各年の合計人数に対する比率である。

史料：各年の宗門改帳

表5 太間町からの転出者の移動先と人数

年	大津	京都	近江	「田舎」	その他	不明	合計
1840		1 (8.3)				11 (91.7)	12 (100.0)
1841	4 (33.3)	1 (8.3)		1 (8.3)		6 (50.0)	12 (100.0)
1842	7 (53.8)	2 (15.4)		1 (7.7)		3 (23.1)	13 (100.0)
1843	18 (60.0)	5 (16.7)	1 (3.3)	2 (6.7)		4 (13.3)	30 (100.0)
1844	3 (30.0)			2 (20.0)	1 (10.0)	4 (40.0)	10 (100.0)
1845	15 (100.0)						15 (100.0)

注)「大津」には市街地が接続している松本村・馬場村を含む。

カッコ内は各年の合計人数に対する比率である。

史料：各年の宗門改帳

表4と表5は、太間町の人口移動における主な転入元と転出先を分類したものである。これを見ると、転入・転出を問わず、移動の大半は大津市中との間で生じており、それに続いて京都との間でみられたことがわかる。大津を除く近江国各地域との間での移動は少数であるが、「田舎」が近江を示すものと推測される。天保11年（1840）は転入・転出ともにとりわけ多くの不明がみられるが⁷⁾、その後の動向をみれば多くは大津市中における動きであったと想定されるだ

表6 太間町の転入・転出に占める大津市中の比率

	大津市中から太間町への転入			太間町から大津市中への転出		
	個人単位	世帯単位	転入者計	個人単位	世帯単位	転出者計
1840	25.0		8.0			0.0
1841	33.3	66.7	50.0	33.3	33.3	33.3
1842	60.0	88.9	82.6	33.3	100.0	63.6
1843	20.0	100.0	87.1	40.0	64.0	60.0
1844	25.0	100.0	76.9		37.5	30.0
1845		100.0	91.3	100.0	100.0	100.0
合計	29.6	78.7	67.8	33.3	58.0	52.2

史料：各年の宗門改帳

ろう。太間町をめぐる移動の性格をさらに検討するため、転入者全体に占める大津市中からの比率および転出者全体に占める大津市中への比率について、個人単位と世帯単位に分類して示したのが表6である。これをみると、転入・転出ともに、大津市中との間では世帯単位が多かったことがわかる。なお、天保11年(1840)については転入元・転出先のいずれも不明の多さが影響して数値が小さくなっているものであり、それを勘案すれば、大津市中での移動は世帯単位のものにさらには多くなると推測される。

世帯単位での移動が都市内部で完結するケースが多いことは明治前期の京都でも観察されており、この理由として家屋敷の売買・賃借において請人を要することなどがあげられ(本多・村上・河原2007)、大津でも同様の状況であったと推察される。一方で、京都や近江の農村地域とは個人単位での移動が多く、これは他地域との移動が奉公や婚姻などを契機としたものが多かったことを示すといえるだろう。

前述のように、太間町の人口変動は借屋世帯の流動性の高さの反映であることが示されたが、こうした借屋世帯は主として大津市中で、状況に応じて頻繁に移動を繰り返していたことがうかがわれる。水谷・大場(1995)によれば、東海道筋の上京町と大津の北西端にある尾花川町では、地価の格差が平均で8倍、最大で20倍あったという。こうした地価の格差は借屋の賃料にも影響していたと考えるのが自然であろう。一般的に、家持と比較して借屋世帯の経済基盤は脆弱であり、景況に左右されるケースも多かったと考えられる。そうしたときの対応として転居が行われていたのではなかろうか。すなわち、借屋世帯における大津市中での頻繁な転居は、経済的状况に応じたきわめて合理的なものであったと推測される。

V 幕末における京都からの転入世帯

本節では宗門改帳にみえる個別的な移動の事例として、京都からの転入世帯に関して検討を行う。太間町の宗門改帳に記載される各世帯の檀那寺は、ほぼすべてが大津市中か近江国内となっている。檀那寺の位置は居住地と必ずしも一致しないが、一定の相関があると考えられる。

表7 京都の寺院を檀那寺とする太間町の住民

筆頭者	檀那寺（所在地）	登録	除外
中屋久次郎	永養寺（寺町仏光寺下ル）	文久2（1862）	—
万屋為吉	光清寺（出水千本西入）	元治1（1864）	慶応1（1865）
近江屋五兵衛	福円寺（麩屋町三条下ル）	慶応1（1865）	—
沢屋有菫	閑唱寺（下珠数屋町東洞院西入）	慶応1（1865）	慶応2-4（1866-1868）

史料：各年の宗門改帳

そこで本節では、京都に位置する寺院を檀那寺とする転入世帯の背景をみたい。

表7に示すとおり、京都の寺院を檀那寺とするのは対象期間を通じてわずか4世帯となっている。Ⅲでみた世帯単位の転入・転出の大部分が大津市中であることを考えれば不思議ではないが、注目すべき点は、これら4世帯の転入時期がいずれも幕末であること、さらには元治元年（1864）と慶応元年（1865）に3世帯（12人）が出現することである。この転入の背景を直接的に示す史料はないものの、大きな要因として考えられるのが元治元年（1864）の禁門の変による京都の大火である。元治大火による人口へのインパクトを分析した浜野（2007: 199-203）によれば、焼失区域に含まれる3町（衣棚北町、衣棚南町、西堂町）の人口は、大火前年の文久3年（1863）から直後の元治元年（1864）にかけて45～62%減少し、とりわけ借屋世帯での減少が顕著であったという。これら3町の明治初年に至るまでの人口は、停滞、一定程度の回復、大火前の水準へ回復、と異なるものであったが、いずれにせよ焼失直後には少なくない住民の生活に影響を与えた。元治大火によって家屋敷や生業を失った住民がどのような対応をとったのか、その全体像は明らかでないが、被災者の多くは一時的にせよ恒久的にせよ縁者を頼ってどこかに避難をする必要があったと推測される。Ⅲの分析では大津から京都へは個人単位の移動が多かったことが示されたが、例えば、奉公を終えた後に京都で所帯を持った者が元治大火によって家族とともに大津へ避難したなどというケースも考えられよう。また、幕末の太間町では家屋敷が埋まらない期間が少なからずあったが、このことが避難先として選択されやすい状況をつくりだしていた可能性もあろう。こうした状況を総合すれば、表7に示したうちの3世帯は元治大火を背景とした転入であったと考えられるのである。これらの3世帯についてその後の動向を追ったところ、1世帯は転入の翌年、もう1世帯は明治2年（1869）までのどこかの時点で太間町から転出している。残り1世帯については史料の最終年（明治3年（1870））まで町内に居住し、明治2年時点では塗物渡世によって生計を立てていた。数年で転出した住民と太間町に留まった住民の判断を分けたものは不明であるが、明治維新に至るまで京都でみられた混乱や経済的復興の遅れも影響していた可能性がある。

以上のように、幕末の京都から太間町へは元治大火を契機とした転入世帯があったと考えられる。太間町の史料からみられた事例はわずか3世帯12人であるのだが、同様の事例が大津の

各町においてみられたとすれば、かなりの数にのぼることになる。京都は元治大火で減少した人口は大火前の水準に回復しないまま明治時代を迎えたとされている（浜野 2007: 199-203）。太間町に転入して居住を続けた住民は、そうした状況に対応するかたちでみられたものなのかもしれない。

VI おわりに

本稿では、幕末における大津・太間町の宗門改帳を利用することによって、人口変動とその背景に関する検討を行った。最後に、本稿で明らかになったことと今後の課題を示して、まとめたい。

太間町の人口は、対象期間当初の文政11年（1828）に160人あまりみられたが、1840年前後には100人程度まで減少し、その後は100～140人程度で推移をした。こうした人口の変動は、ひとつには町内の奉公人の減少が、もうひとつには借屋世帯の入居率が反映されたものであった。さらに、後者に関わって、借屋世帯では各々の状況に応じて大津市中で頻度の高い移動を行っていたことが推察された。一方、他地域との移動に目を向けると、相対的には個人単位での移動が多く、京都や近江各地との間での奉公や婚姻に関わって行われたとみられる。このように、幕末の太間町の人口に対しては人口移動の与える影響がきわめて大きかった。また、太間町と他地域との人口移動のなかで明瞭に確認されたのが幕末における京都からの転入であった。これは元治大火とその後の京都の動向を背景としており、非常事態が発生した際の避難先として選択されうるだけの地域間関係の大きさがあったともいえるだろう。

このような太間町の人口変動や他地域とのかわりが大津市中一般でみられたものなのか、現時点では断定することは難しい。しかし、太間町でみられた借屋世帯の移動は大津市中と相互に生じており、少なくともこの点に関しては一般性のあるものと思われる。いずれにせよ、大津の他町にも分析対象を広げて、比較・検討することが必要となろう。

以上のことに加えて、本稿で示された結果が大津の都市構造や社会構造のなかでどのように位置づけられるかも重要な課題である。例えば、近世中期から幕末までに大津の人口が2割ほどの減少をみたが、この長期的な傾向のなかでの太間町の人口変動の位置付けを考えていく必要がある。また、太間町は人口規模が小さいながらも旧町のひとつであり、さらに大津祭で曳山を出す経済的な安定性を有する町であった。ところが、本稿でみた太間町のあり方は、家持世帯は安定しているものの借屋世帯の流動性がかなり高く、さらに家屋敷が埋まらない期間も短くはなかったとみられる。ここからは、太間町の性格と人口変動の関わりの整合性をどのように解釈するかという課題が浮かび上がってくる。これらの課題に対しては、大津をめぐる経済動向や借屋の需給といった諸要素との関わりを丁寧に分析していくことを通じて検討を行う必要がある。

（宮崎産業経営大学法学部）

【謝辞】 本稿の史資料の利用にあたっては、大津市歴史博物館の高橋大樹氏にご高配を賜りました。ここに厚く御礼申し上げます。

【注】

- 1) 近江を対象とした人口研究については、矢守（1970: 212-244）による彦根城下町に関するものがあげられるが、京都とのかかわりが最も強かった近江西部を対象としたものは管見の限りみられない。
- 2) 本研究で利用した帳面は「宗門人別改帳」「宗旨人別改帳」といった標題になっているが、これら全体を指し示す場合には「宗門改帳」と表記することとする。
- 3) 歴史人口学の導入と展開については速水（2001）などに詳しい。
- 4) 宗門改帳の記載事項について、地域ごとの差異を検討したものとして平井（2015）がある。また、同一の町・村であってもある時点から記載方法の変更がみられることもある。
- 5) 現住地主義は現代の住民票に近いかたちでの人口が把握され、奉公のような一時的な転入者も調査対象とされる。それに対して、本籍地主義はあくまでも正式な手続きのうえでの異動が対象となり、一時的な移動を反映されない。既往の研究成果をみると、前者は住民の流動性の高い都市・町場において、後者は相対的に住民構成の変化が小さい転出入の少ない村落地域において採用されたケースが多い。
- 6) 加えて、明治2年（1869）の帳面は、それ以前のものとは異なり、本籍地主義によって記載されていることも対象外とされた理由としてあげられる。
- 7) 天保11年（1840）に「不明」が多数みられるのは、宗門改帳の末尾にまとめられた異動一覧に多数の記載漏れが確認されたためである。具体的にいうと、天保10年（1839）と天保11年（1840）の個人レベルでの比較によって明らかになる転入者・転出者について、天保11年（1840）の帳面末尾の異動一覧と突き合わせたところ、異動一覧の記載が実際よりも大幅に少なかったことから明らかになった。

【文献】

- 大津市 1981. 『新修大津市史 4 近世後期』大津市。
- 大場 修 1998. 近世地方都市における町屋敷の売買と街区構成. 日本建築学会計画系論文集 503, 179-186.
- 木村至宏 1976. 近世における曳山祭礼—とくに大津祭の発生と展開を中心に—. 藝能史研究 53, 36-50.
- 斎藤 修 2002. 『商家の世界・裏店の世界』リポレポート.
- 浜野 潔 2007. 『近世京都の歴史人口学的研究』慶應義塾大学出版会.
- 浜野 潔 2011. 幕末京都への地理的移動パターン—「生国」の観察を通じて—. 関西大学経済論集 60(2-3), 39-51.
- 速水 融 2001. 『歴史人口学で見た日本』文藝春秋.
- 速水 融 2009. 『歴史人口学研究』藤原書店.
- 樋爪 修 1995. 近世後期大津の町定. 大津市歴史博物館研究紀要 3, 29-42.
- 樋爪 修 1996. 近世大津町の小歩きについて. 大津市歴史博物館研究紀要 4, 1-12.
- 樋爪 修 2012. 幕末期京津間の物資流通—『大津御用米会所要用帳』を素材として—. 日本史研究 603, 54-82.
- 平井晶子 2015. 宗門人別改帳の記載形式. 落合恵美子編『徳川日本の家族と地域性』ミネルヴァ書房, 435-459.
- 本多健一・村上富美・河原典史 2007. 京都府戸籍簿の維持利用とその歴史地理学的研究—『函谷鉦町戸籍簿』にみる居住と移動—. 歴史地理学 49 (3), 1-20.

水谷久美・大場 修 1995. 元禄絵図にみる近世大津町の都市構成. 日本建築学会近畿支部研究報告集 計画系 35, 1021-1024.

矢守一彦 1970. 『幕藩社会の地域構造』大明堂.